日本語方言文末詞の生成と発展

町　　博　光

1．はじめに

文末詞[注1]は、藤原がくり返し説くように、文の末尾に位置し話者の感情や意志を最後的に統括している。この日本語に特徴的とされる文末の訴え成分は、日本語の本土方言[注2]にも琉球方言にも繁栄している。本土方言の文末詞も琉球方言の文末詞もともに文末に位置し、話者の訴え機能を有する特定の訴え成分となっている。

ところが、文末詞を形式的に分類すると、本土方言ではナ行音文末詞[注3]がさかえているのに対し、琉球諸島方言ではヤ行音文末詞[注4]がきわめて盛んである。文末詞の派生形態において、本土方言と琉球方言とでは、著しい対立を見せているのである。またヤ行音の文末詞は、日本語史上、上古においてさかんだったことが報告されている。それがなぜ現代の本土方言ではナ行音に変わっていったのか、この変化はいつごろから起こったのだろうか。

琉球方言の文末詞と本土方言の文末詞を対比的にとらえて、その発生状況を考察していこうとするのが本稿の目的である。

2．先行研究

日本語の文末詞については、藤原（1953、1972）が文末詞（文末助詞）の存在と重要性を指摘しその分類と派生傾向を示して以来、各地の方言文末詞の記述や日本語の中での位置づけ、また諸外国語との比較など多くの研究がなされている。『方言研究年報』（第1巻1958）では、「特集 『文末助詞』報告」が組まれ11地点での報告がなされている。これ以降各地の文末詞の記述的な研究が多くなされている。藤原には、『日本語文末詞〈文末助詞〉の研究』（上）（中）（下）（1982-1986）、『文末詞の言語学』（1990）など27点にのぼる研究がある。また文末詞の通時的研究（佐々木、藤原編『日本語文末詞の歴史的研究』1998）や世界の諸言語との対照研究（『言語類型論と文末詞』1993）などにも興味をひろげている。最近は、日本語教育の世界でも日本語文末詞の重要性が認められ、研究が行われている（大浜2004）。また、話者の心的態度（モダリティー）をになう重要な文法要素として文末詞が注目されるようになっている（井上2006）。

琉球方言の文末詞については、藤原が著作の中でふれることはあっても、まとまった報

告は多くない。町（1976、1998、2009）生塩（1998）、名嘉真（1998）、加治工（1998）などがある（注 6 参照）。いずれの報告を見ても、文末にあって話者の訴えを統括するという日本語文末詞の機能には彼我の差は認められない。

本稿は、本土方言と琉球方言の文末詞の機能的な相違を詳細に検討していくものではなく、本土方言文末詞と琉球方言文末詞の形式面での相違を中心に見ていくものである。

3．本土方言のヤ行音文末詞とナ行音文末詞

以下には、本土方言におけるヤ行音文末詞とナ行音文末詞の存立状況を見ていくこととする。ヤ行音文末詞とナ行音文末詞をとりあげるのは、両者が数の上でも用法上でも、代表的な文末詞であることによる。資料を、『方言研究年報』（1958）から引用する。これには「特集 『文末助詞』報告」が組まれ 11 地点[注 5]からの報告がある。とりあげられた文末詞の数は、地点によりかなりの異なりが認められる。文末詞の認定の問題が大きく関わっていると考えられる。しかしながらこれらの論考は、各地点での文末詞の記述という統一的な主題に即して各報告が執筆され、各地の文末詞の実態を反映していると考えられる。

取り上げた文末詞の配列は、原生的文末詞（本来的な文末詞）を見出しにし、複合形文末詞をその横に並べることにする。原生的文末詞の配列は五十音順とする。また、ナ行音とヤ行音が複合形を形成している場合、後部要素によって分類している。

3.1 福島県における文末詞

ナ行音文末詞 12 例、ヤ行音文末詞 8 例が報告されている。

ナ行音文末詞		ヤ行音文末詞			
ナ	ナー	ヨ			
ナイ	ゾナイ	イ	ナイ	ゾイ	ノカイ
	ゾナン		ダイ	バイ	ワイ
ナン	ゾナン　ゾン　ダン　ベン				
ノ	ノー				

ナ行音文末詞が栄えていることが、数の多さはもちろんだが複合形文末詞が多く作られていることからもうかがい知ることができる。

3.2 佐渡方言の文末詞について

ナ行音文末詞 3 例、ヤ行音文末詞 6 例が報告されている。

ナ行音文末詞		ヤ行音文末詞		
ナ	ナー	ヤ	ヤー	カヤ
ナエ		ヨ	ヨー	ヨイ

ナ行音が少ないのは文末詞の認定の問題なのだろうか。

3.3 能登島向田方言の文末詞

ナ行音文末詞 18 例、ヤ行音文末詞 10 例が報告されている。

ナ行音文末詞		ヤ行音文末詞	
ナ	ナー	ヤ	ヤー
ネ	ネー		ネヤ　ニャー
	ゾネ　ゾイネ　カネ　カイネ		カイヤ　ガイヤ
	ガイネ　ガイトネ　トイネ		トイヤ　ワイヤ
	ワネ　ワイネ	ヨ	ヨー
	マネ　マネー		
ノ	ノー　カノー		

ナ行音文末詞の隆盛と、とくにネ類の文末詞の旺盛な複合形の創造が注目される。

3.4 豊橋方言の文末詞

ナ行音文末詞 10 例、ヤ行音文末詞 6 例が報告されている。

ナ行音文末詞		ヤ行音文末詞	
ナ	ナー	ヤー	ナヤー　カヤー
	カナ　カナー		ナーヤイ
ネ	ネー	ヨ	ヨー
	カネ　ワネ		
ノン	ワノン		

3.5 愛知県・三重県海岸線の文末詞

ナ行音文末詞 27 例、ヤ行音文末詞 26 例が報告されている。

ナ行音文末詞		ヤ行音文末詞	
ナ	ナー	ヤ	ヤー
	サナ　ゾナ　ゾイナ		ネャ
	カナ　カイナ　ガナニナ　ワナ		ノーヤ　ノイヤ
ナイ			ゾヤ
ナン			カヤ　キャ　カイヤ
ニー			テヤ
ネ	ネー		ガヤ　ギャ　ガイヤ
ノ	ノー		ワヤ
	ノイ　ノエ	イ	イー

ヨノ　サノ　カノ　カイノ　ガノ
ンノ（ニノ）
ワノ　ワイノ

エ　エー
ヨ　ヨー
ゾヨ　ジョ
カヨ
ワヨ
ナーヨ　ノーヨ

ナ行音文末詞とヤ行音文末詞がほぼ拮抗している。ヤ行「ヤ、イ、エ、ヨ」とナ行「ナ、ニ、ネ、ノ」のそれぞれの行の語がほぼ用いられ、派生形も多岐にわたる。

3.6　大阪方言における文末詞

ナ行音文末詞 14 例、ヤ行音文末詞 9 例が報告されている。ナ行音の複合形が栄えていることが注目される。

	ナ行音文末詞	ヤ行音文末詞
ナ	ナー	ヤ　ヤイ　ヤエ
	ガナ　カイナ	ノンヤ　ネンヤ　ンヤ
	ワイナ	エ
ネ	ネー	ヨ　ネヨ
	カイネ	
	ワイネ	
ノ	ノー　ノン　ン	
	ネンノ	

3.7　神戸方言における文末詞

ナ行音文末詞15例、ヤ行音文末詞13例が報告されている。複合形の多さが特徴的である。

	ナ行音文末詞	ヤ行音文末詞
ナ	ナー	ヤ　ヤー　ヤイ
	ヨナ	ドイヤ
	ドイナ	カイヤ　カヤ　ガイヤ
	カイナ　ガイナ	テヤ　テーヤ
	ンカイナ　ノンカイナ	イ　ガイ
	ワナ　ワイナ	ヨ　ヨー
ネ	ネン	
	カイネ　ガネ	
ノ		

3.8　隠岐島五箇方言の文末詞

ナ行音文末詞 15 例、ヤ行音文末詞 11 例が報告されている。

ナ行音文末詞		ヤ行音文末詞	
ナ	ナー	ヤ	カヤ
	カナ　ガナ		ゾヤ　ズヤ（ズヤー）　ジ
	デナ		ジヤ（ジヤー）
	ワナ		テヤ
ノ	ノー	ヨ	ヨー
	ヨノ		
	カノ　ガノ		
	ワノ		
	チョノ		
ネ	ネー		

3.9　瀬戸内海西部島嶼方言の文末詞

ナ行音文末詞 13 例、ヤ行音文末詞 20 例が報告されている。広島・山口県域などを含んだ地域での報告である。ナ行音文末詞とヤ行音文末詞による複合形が多く創り出されている。本土方言において、ヤ行音文末詞がナ行音文末詞よりも数的にまさるのは、本地点からである。

ナ行音文末詞		ヤ行音文末詞	
ナ	ナー	ヤ	ヤー
ノ	ノー　ノン		ノヤ　　ノーヤ
	ノヨノ　ノイノ		ネヤ
	ネーノ　ニェーノ		ガヤ　　ガヤー
	トイノ	ヨ	ヨー
ネ	ネー		ノヨ　　ノイ
ニャー			ゾヨ　　ゾイ
			モンヨ
			チュンヨ　ツンヨ
		エ	ノエ　　ノーエ　　カエ

3.10　大分県南部の方言文末詞

ナ行音文末詞 12 例、ヤ行音文末詞 12 例が報告されている。ナ行音文末詞とヤ行音文末詞が同数となっている。

ナ行音文末詞		ヤ行音文末詞	
ナ	ナー	ヤ	
	カナー　ガナー		ワイヤー
	ワナー	エ	エー
ノ	ノー		ナエ　カエ　カエー
	ドノー		ガエ　ガエー
	カノ　カノー		ワエ
	ワイノー	ヨ	ヨー
	ヤノー		

3.11　長崎市方言の方言文末詞

ナ行音文末詞 18 例、ヤ行音文末詞 16 例が報告されている。

ナ行音文末詞		ヤ行音文末詞	
ナ	ナー	ヤ	ヤー
	タナ　ダナ	ヨ	トヨ　トヨー
	ツナ		タイ　ター　タン　タナ
	トナ　トナー		トタイ　チュータイ　トタン
ノ	ノー		ダイ　ダー　ダーイ　ダン
	トノ　トノー　トン　トトン		
ネ	ネー		
	サネー		
	カネー		
	トネー		

ヤ行音文末詞の中に「タイ」「ダイ」を含めている。報告の中に、「「タイ」は「トヨ」からの転成を思わせる。当市でさかんに用いられている。ただし「トイ」は聞かれない。」（pp. 155）とあり、タイとトヨとは同系列のものと判断している。

4．琉球方言のナ行音文末詞とヤ行音文末詞

以下の資料を、佐々木・藤原編『日本語文末詞の歴史的研究』(1998）から引用する。[注6]

4.1　与論島方言

ナ行音文末詞	ヤ行音文末詞
na:　tʃina:　mununa:　ganai	ja:　tʃija:　do:ja:　bo:ja:　munuja:　jan　do:jan　bo:jan　munujan

jo:

ju:

ji:　munui

ナ行音に 4 例、ヤ行音に 13 例を数えることができる。

4.2　伊江島方言

ナ行音に 1 例、ヤ行音に 6 例を数えることができる。

ナ行音文末詞	ヤ行音文末詞
ナ	ヤ・ヤー
	ヨ・ヨー
	ㇶ・ㇶー

4.3　宮古島方言

ナ行音文末詞	ヤ行音文末詞
na	'ii　doo'i　ha'i
	'jaa　ga'ja
	'jo　'joo

ナ行音に 1 例、ヤ行音に 7 例を数えることができる。

4.4　鳩間島方言

ナ行音文末詞	ヤ行音文末詞
no:	ja　kaja:
na:	jo:
	ju:

ナ行音に 2 例、ヤ行音に 4 例を数えることができる。

琉球方言でのヤ行音文末詞は日本語史上、上古の文末詞と似通っていることが分かる。いわば古態の残存と位置づけてもよかろう。

藤原は全国の文末詞を網羅したのちに、文末詞においても、九州方言と琉球方言との類似性を見ている。

> 以上、九州を見おわって思われるのは、「ヤ」文末詞の隆盛である。
>
> 九州南部－鹿児島県－では、ことに「ヤ」がさかんにおこなわれていて、しかも、その用法に、諸態・諸種のものの認められるのが特筆される。南島方言上の「ヤ」文末詞に通じるようなものもここに見いだされるのが、とくに私どもの関心を引く。(『日本語文末詞〈文末助詞〉の研究』(上) 1982、p. 480)

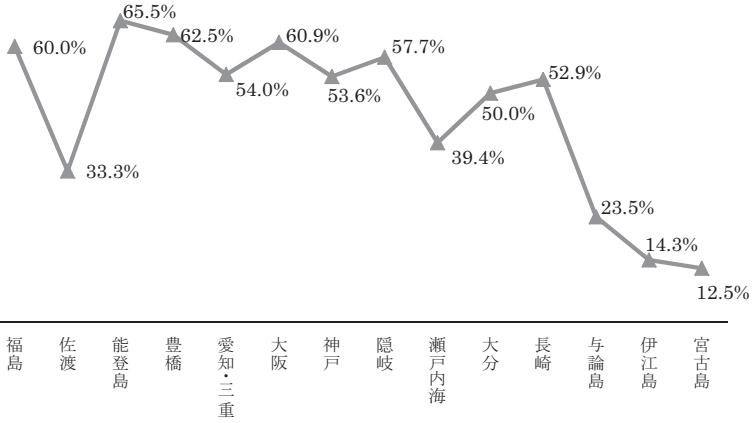

図１　地点別のナ行音とヤ行音におけるナ行音の割合

琉球方言においてはナ行音文末詞がほとんどなく、ナ行音文末詞の割合はかなり低くなっている（鳩間島は用例数が少なくデータから除いた）。

本土方言においては、瀬戸内海島しょがかなりナ行音文末詞の割合が低くなっている。この傾向は、相対的に九州から琉球諸島へと続いていることが理解できる。

以上の結果を図１にまとめた。

５．日本語史上のナ行音文末詞とヤ行音文末詞

佐々木・藤原編『日本語文末詞の歴史的研究』（1998）には、上古から中世までの文末詞の４編の論考が収載されている[注7]。前章では、ナ行音文末詞とヤ行音文末詞の分布を地理的に観察した。ここでは日本語の文末詞が歴史的にどのような変遷をたどってきたのかを４編の論考を中心に見ていきたい。４編の論考に、近世後期の文末詞の資料として『浮世風呂』（岩波古典文学大系本）の調査結果を加えた。これによって、上古から近世後期までのナ行音文末詞とヤ行音文末詞の様相をある程度つかむことができよう。いわゆる一語を対象とした語誌研究はこれまで相当数おこなわれているが、文末詞が体系的にどのような変遷をたどっているかを見ていくことはこれまでになかった。日本語の文末詞の生成発展をあきらかにするうえでこの試みは画期的なことであろう。ただ、文末詞が口頭語を中心に使用されるものである以上、資料の整一性に問題があることも十分に承知したうえでの作業である。

5.1　上古語の文末詞

上古の文末詞としてナ行音文末詞を 11 例、ヤ行音文末詞を 18 例認定している。資料は、

古事記、日本書紀、万葉集、風土記、仏足石歌、祝詞、金石文類などから幅広く採録されている。また、「文末詞」が「原生」と「転成」という二つの大分類をするとなれば、上古においては「原生」が多く、「転成」は考えにくいものとなることを指摘している。（同書 pp. 5-6）論考の「２、上代文末詞一覧」には以下のものが取り上げられている。

ナ行音文末詞				ヤ行音文末詞		
な、	に、	ぬ、	ね	や、	やし、やも、ゑ、	よ
なも	にも	ぬも	ねも[注8]	えや、かや		もよ
なむ				をや、とや		もがや
なわ				もや		もがもよ
もがもな				はや		かもよ
				ばや		そよ
						とよ

ヤ行音文末詞が隆盛であることが注目される。このことは琉球方言のヤ行音の隆盛を想起させるものである。

5.2　平安時代語の文末詞

平安時代語のうち、「和文に用いられている文末詞」を記述したものだとの断りがなされている。文末詞が口頭語的なものである以上、資料の整一性をはかることは不可欠であるが、和文に限定して整理していることで、ある程度の整一性を保っていると判断されよう。ナ行音文末詞が 15 例、ヤ行音文末詞が 20 例である。一覧表は作成されていないが比較のために一覧表を作成する。

ナ行音文末詞	ヤ行音文末詞
な	や
かな、ぞな、ぞかな	かや、ぞや、なや
かしな、ぞかしな、よかしな	かとや、とや、もがなや
かなな、とな、とかな、とかやな	かなや、ともや、よや、をや
もがな、ものをな	よ
やな、よな	ぞよ、とよ、なよ、やよ
	かとよ、かはとよ、ぞとよ、ばとよ

上古に続いて、まだヤ行音文末詞のほうが優勢である。上古と比べて、「転成文末詞」が多くなっているのも、文末詞の派生状況を見せてくれるものとして注目される。

5.3　近古の文末詞

この時期の言語の特色について、来田は、「この時代は古代語から近代語への過渡期とされるように、言葉の変化の著しい時代である。文末詞も例外ではない。」（p. 85）と述べ

ている。覚一本平家物語ではヤ行音文末詞が 7 例観察されているのに対し、ナ行音文末詞は 3 例しか観察されていない。ところが天草版平家物語になると、ヤ行音文末詞が 4 例と減少するのに対し、ナ行音文末詞は 7 例とおおはばに増えている。ここにおいて、ナ行音文末詞の数がヤ行音文末詞を逆転している。この時代が言葉の変化の著しい時代であったことを裏付けていよう。虎明本狂言では、ナ行音文末詞が 7 例、ヤ行音文末詞が 6 例とりあげられている。

3 者をまとめてみると、ナ行音文末詞が 7 例、ヤ行音文末詞が 7 例ということになる。

	ナ行音文末詞	ヤ行音文末詞
（覚一本平家物語）		
	ナ	ヤ　ヨ
	ヨナ	ゾヤ　ゾヨ
	カナ	カヤ　ゾトヨ
		ハトヨ
（天草版平家物語）		
	ナ　ノ	ヤ　ヨ
	ヨナ　ヨノ	ゾヤ　ゾヨ
	カナ	
	ヤナ	
	ナウ	
（虎明本狂言）		
	ナ　ナウ　ノ	ヤ　ヨ
	ヤナ　ヨノ	ゾヤ　ゾヨ
	ヨナ	カヤ　ゾトヨ
	ヨヤナ	

来田は、変化の激しいこの時代の文末詞の生成について、

> 虎明本狂言（及び天草版平家物語）に見られる新たな文末詞は、ナ行音文末詞類・ヤ行音文末詞類に於ける複合形と、名詞転成文末詞（モノ）や感動詞系転成文末詞（ヤイ類、ヤレ類）と言った転成文末詞類である。（p. 108）

と指摘している。

5.4　大蔵流古狂言虎明本における文末詞

同様に、中世の古狂言について佐々木も調査している。佐々木の調査では、大蔵流古狂言虎明本にはナ行音文末詞が 21 語、ヤ行音文末詞が 17 語用いられているという。以下にとりあげておく。

ナ行音文末詞	ヤ行音文末詞

ナ　　ヤナ　ヨナ　ヨヤナ　カナ
　　カシラヌナ　ゾナ　ガナ　モノオナ
ナウ　ヤナウ　ヨナウ　カナウ
　　ゾイナウ　ガナウ　ワナウ　トナウ
ノ　ヨノ　カノ　トノ

ヤ　　ゾヤ
ヤイ　カヤイ　ゾヤイ　イヤイ
　ワヤイ　ワイヤイ
　ヤレ　カナヤレ
ヨ　イヨ　ゾヨ　ゾトヨ　マデヨ
　　カシラヌヨ　　ゾシラヌヨ

ここにおいて、ナ行音文末詞とヤ行音文末詞が数的に逆転していることが見てとれる。またこの時代まで下ると、上古の感声的な文末詞が転成して多彩な複合形文末詞を形作っていることもうかがい知ることができる。

5.5　近世後期の文末詞

以下に『浮世風呂』（岩波古典文学大系本）の文末詞を整理して示す。ナ行音文末詞を33例ヤ行音文末詞を19例とりあげることができた。現代の本土方言の状況と類似していることがわかる。

ナ行音文末詞

な
　かな、がな、てな、ねへな
　わな、わいな
なあ
　ぜなあ、ぜえなあ
からに
のに
ね
　かね、けね、さね、てね、のさね
ねえ
　かねえ、さねえ、よねえ
の
　かの、かいの、からの、ごとの
　わの、わいの
のう
　けのう、さのう、よのう

ヤ行音文末詞

や
　かや、ぞや、のや、めや、ものをのや
　わや、をや

よ
　かよ、ことよ、ぞよ、なよ、によ
　のよ、ものかよ、ものよ、やよ
　ようよ

近世後期になると、文末詞が多彩になっている。原生的文末詞の「ノ、ナ」や「ヤ、ヨ」にいろいろな感動詞や名詞（モノ、コト）などが複合して転成文末詞ができていく過程を見ることができる。それにつれて文末詞の語形も複雑になっている。日本語の文末詞の生成発展の道筋が垣間見えてくるようである。以上の結果を図2に示す。

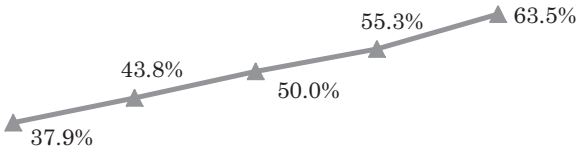

図２　時代ごとのナ行音とヤ行音におけるナ行音の割合

６　ナ行音文末詞の成立

上古、ナ行音文末詞は現代のように発展していなかった。中世になって、ようやくヤ行音文末詞を数の上でも圧倒するようになった。藤原は、ナの起源を柳田の説く「中世の口言葉のナン」からと考えている。

> 柳田国男先生は、早く、『国語の将来』（創元社　昭和 14 年 9 月）p. 276 で、
>
> 中古の口言葉のナン
>
> を、「ナ」の起源と見ていられる。なるほど、「ナン」は、[nan] ＞ [nau] ＞ [nɔ:] ＞ [na:] ＞ [na] の転化をたどって、「ナ」になったかもしれない。（また、[nɔ:] から [no:] [no] も生じ得たであろうか。）（『日本語文末詞〈文末助詞〉の研究』p. 130）

ナンが起源であったとしたらナ行音の文末詞は相当に新しいことになる。実際、上古と平安時代の資料にはノは認められない。ナは感声的なものとして上古にも認められる。近古以降に、上来の変化をたどってノ文末詞が発展してきたものであろう。そのような発展の系譜がありながら、現在ではナーとノーは地域的な分布を見せている。ナーとノーの地域的な対立はかなり新しいものと考えられる。

おわりに

日本語方言のヤ行音文末詞とナ行音文末詞を対比的に見てきた。両形の文末詞が地域的にどのような広がりがあるかを概観した。さらにその分布が歴史的にどのような意味を持っているのかについても検討した。

ヤ行音文末詞は歴史的に古く、成立的にも感声的なものからと考えられる。いわば日本語文末詞のなかで古態性を有するものである。地域的にも琉球方言に隆盛である。このヤ

行音文末詞は九州方言ともつながっていくものである。

いっぽう、ナ行音文末詞は、その成立は比較的新しいと考えられる。地理的に東日本から西日本にひろく分布している。ナ行音文末詞類のなかでのナ形とノ形の分布状況もまた注目しなければならない。

これまで日本語の文末詞はとかく文法的観点からその訴えかけ性が注目され、意味機能の分析が主流を占めていた。本稿では、日本語方言文末詞も日本語の歴史上に位置付けてみていくと、地理的な広がりと相関していることを明らかにすることができた。

注

1）藤原（1972）の用語による。「文末詞」か「文末助詞」かについては、藤原も『日本語文末詞〈文末助詞〉の研究』（上）（中）（下）（1982-1986）にいたっても両者を並存させている。ここで問題にしている文末の特定要素は、あくまで叙述成分に付随したものであると考えれば「文末助詞」と呼ぶのが適当であろうし、文末の独立成分であると認める立場に立つと「文末詞」が適当となろう。本稿では、ヤ行音文末詞とナ行音文末詞ともに感声的な由来のものであり、独立性が高いと判断して「文末詞」を用いる。

2）日本語の方言は、本土方言と琉球方言に大区分することが一般的である。この区分方法に従い、本土各地の方言を本土方言とし、琉球諸島に行われる方言を琉球方言とする。

3）藤原（1972）の形式的な分類による。ナ、ノ、ネなどをいう。

4）藤原（1972）の形式的な分類による。ヤ、ヨなどをいう。

5）以下の 11 の報告がなされている。

① 福島県における文末助詞 ― 岩瀬郡天栄村を中心として―（飯豊毅一）
② 佐渡方言の文末助詞について ― 両津市大字片野尾における―（押見虎三二）
③ 能登島向田方言の文末助詞（愛宕八郎康隆）
④ 豊橋方言の文末助詞についての実状報告（高瀬徳雄）
⑤ 愛知県・三重県海岸線の文末助詞（佐藤虎男）
⑥ 大阪方言における文末助詞（山本俊治）
⑦ 神戸方言の文末助詞（清瀬良一）
⑧ 隠岐島五箇方言の文末助詞（神部宏泰）
⑨ 文末助詞の生態 ― 瀬戸内海西部島嶼方言について―（神鳥武彦）
⑩ 大分県南部の方言の文末助詞（大畑　勘）
⑪ 長崎市方言の文末助詞（林田　明）

6）以下の報告がある。

① 奄美諸島与論島朝戸方言の文末詞（町　博光）
② 沖縄伊江島方言の文末詞（生塩睦子）
③ 琉球宮古西原方言の文末詞（名嘉真三成）
④ 沖縄県八重山鳩間方言の文末詞（加治工真市）

表記法については、各論考の表記にしたがう。

7）以下の論考が収載されている。

① 上古の文末詞（沼本克明）

② 平安時代和文語文末詞について（東辻保和）

③ 近古の文末詞（来田 隆）

④ 大蔵流古狂言虎明本における文末特定要素（文末詞）についての基礎的研究（佐々木峻）

8）「ねも」と「なも」には東国方言との注記がなされている。

引用文献

井上 優（2006）「第4章 モダリティ」（佐々木・渋谷・工藤・井上・日高『シリーズ方言学2 方言の文法』）岩波書店

大浜るい子（2004）「終助詞「よ・ね」の機能再考 文脈指定機能を中心に」（『広島大学日本語教育研究』第14号 pp. 1-7）

佐々木峻・藤原与一編（1998）『日本語文末詞の歴史的研究』三弥井書店

広島大学方言研究会編（1958）『方言研究年報 第一巻』広島大学方言研究会

藤原与一（1953）「日本語表現法の文末助詞： その存立と生成」『国語学』第10輯

藤原与一（1972）「方言文末詞（文末助詞）の研究」広島大学文学部紀要；特輯号2

藤原与一（1982-1986）『日本語文末詞〈文末助詞〉の研究』（上）（中）（下）春陽堂

藤原与一（1990）『文末詞の言語学』三弥井書店

藤原与一（1993）『言語類型論と文末詞』三弥井書店

町 博光（1976）「与論島朝戸方言の文末詞 ― 資料報告 ―」（『方言研究年報』続一 pp. 1-17）

町 博光（2009）「沖縄大和言葉の文末詞」（『日本語教育学を起点とする総合人間科学の創出』pp. 61-68）

付 記

本稿は、平成24年度日本語学会中国四国支部大会（11月11日、徳島大学）で発表したものの改稿である。席上、多くのかたがたからご意見ご指摘を賜った。なかでも、大友信一先生からは、方言文末詞の発生は係り結びの衰退に関係しているのではないかとのご指摘をいただいた。話者の強調心理を表現する手段としての係り結びと文末詞の関係は、たしかに重要な観点である。本稿では、日本語史上の文末詞と係り結びの関係に言及することができなかった。今後の課題と認識している。

― まち・ ひろみつ、広島大学大学院教育学研究科教授 ―